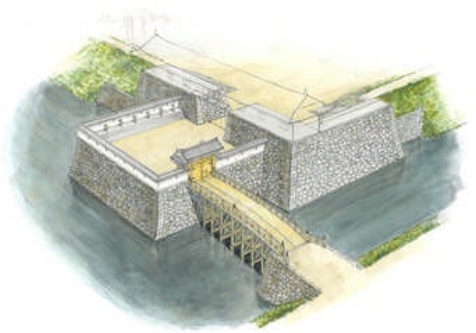


今年の山形市中心部は、幸いにも、例年に比べ積雪量が少ない状況です。

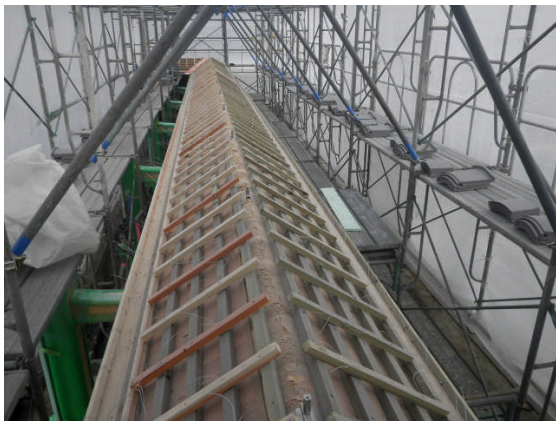
でも、冬は冬…。いくら積雪量が少なくても、気温が低いこの時期、土壁などを造るには、なかなか厳しい条件であることに、変わりありません。

その中でも、職人さん達が一生懸命、工事をしてってくれています。

さて、今回のレポートでは、屋根の瓦葺きと、荒壁造りの工程を追っていきたいと思います。



1 棧木^{さんぎ}



いよいよ瓦^ふ葺きに取り掛かります。

まずは、瓦を固定するために、土居^{どい}葺きの上へ棧木^{さんぎ}を取り付けます。

横方向の横^{よこ}棧を取り付けた後、その上に縦^{たて}棧を取り付けます。

この棧木の取付け方で、瓦の割り付けが決まってしまうので、瓦葺きにおいて、とても重要な役目を果たします。

2 瓦^ふ葺き



棧木に合わせ、瓦^ふを葺きます。

工事に使う瓦は、二ノ丸東大手門で使った瓦と同じく、岐阜県で製作したものです。

瓦の形状や巴^{ともえ}瓦の模様などは、発掘調査で出土した遺物^{いぶつ}を基に決定しています。

3 葺き土と瓦の固定



軒瓦の安定と不陸調整のため、葺き土と呼ばれる良質な粘土を使用します。

また、よく見ると、全ての瓦が、ステンレスの針金で棧木に固定されています。

復原工事ではありますが、表面から見えない部分で、安全面を十分考慮した施工を行っています。

4 谷樋銅板



屋根が交わる谷部分に、銅板で樋^{とい}を付けます。

雨水や降雪により、瓦葺きの下地が傷まないようにする目的があります。

5 棟瓦の補強



屋根の上に立っている金物は、一番上に載る棟瓦^{むねがわら}を固定するために使用するものです。

この金具にボルトを立てます。

6 本瓦葺き



今回施工する瓦の葺き方を『本瓦葺き^{ほんがわらぶ}』と言います。

これは、平瓦と丸瓦を交互に重ね合せた構造です。

写真は、平瓦が葺き終わり、その上に、丸瓦を葺いている状況です。

7 棟瓦



屋根の上端に葺く棟瓦^{むねがわら}は、『のし瓦』と呼ばれる平瓦と、『がんばり瓦』と呼ばれる丸瓦で構成されています。

8 鬼瓦



^{すみむね}隅棟の先端には、^{おにがわら}鬼瓦を設置します。

これで、瓦葺きが完了です。瓦葺きは、とても重厚感があり、土塀全体が引き締まります。

9 軒裏の竹木舞



続いて、荒壁の施工について、レポートします。

写真は、軒裏の下地です。

軒裏も、最後は、^{しっくい}漆喰塗りで仕上げます。

そのため、下地として半割した竹に縄を巻いたものを貼り付けます。

10 波型の基になる^{たるき}垂木



^{たるき}垂木の間隔に合わせて、波型に荒壁を仕上げていきます。

11 荒壁塗り



荒壁を塗ります。

工程として、団子付け～目潰し～^{はんなお}斑直し～大直しと進めて行きます。

12 やざま 矢狭間



四角い開口部は、『やざま』になる所です。形状に合わせて、竹木舞を加工してあります。

矢狭間は、壁向こうにいる敵を、弓矢で射抜くために開けた穴です。

この土塀には、その他に『てっぽうざま』もあります。鉄砲狭間の形状は丸で、矢狭間よりも低い位置にあります。

13 軒裏の波型



軒裏の荒壁を、波型に仕上げているところです。

全部同じ形で仕上げるために、予め波型を模った定規を使います。

14 はんなお 斑直しまで完了



見事な波型ができました。

ちなみに、この波型の形は、二ノ丸東大手門の波型を写し取ったものです。

これで、荒壁の斑直しまで完了です。

次の工程に進むためには、まず、荒壁を中までしっかりと乾燥させなければなりません。

15 荒壁の乾燥



本当は、風に当てて乾燥したいのですが、今は冬。気温も低く、雪も降ります。

この状況で、少しでも早く乾燥させるために、ジェットヒーターで、温風を養生シート内に送風しています。

6 台のジェットヒーターを使っていますが、なかなか乾きません…